

『歎異抄』の“おほせ”に聞く

林 恵 成

『歎異抄』の特徴は、ことに前半師訓の十条の末尾が、

「……………ト云々」

「……………トオホセサフラヒキ」

とあり、その文章表現が聞書ということであろう。また、内容全体が、聖人の御言葉を仰いで“カキツケ”られた書であることは、次に掲げる前序と後序の文に明らかである。

まず前序には、

「仍故親鸞^{ヨレコシラシヤウニシラシヤウ}聖人御物語^{ガタリノオホセキ}之趣^{トコロ}、所^{トドムル}レ留^ミニ耳底^{ミミソコニ}一^{イササカ}、聯注^{サカシス}レ之^{コレヲ}」

とあり、次に後序には、

「古親鸞^{コシラシヤウニシラシヤウ}ノオホセコトサフラヒシ、オモムキ百分^{ヒツ}カ一^{ヒツ}、カタハシハカリヲモ、オモヒイテマヒラセテ、カキツケサフラウナリ」

とある。この黒傍点の「御物語^{オシモノガタリ}」、さらに「オホセ」という言葉が、本文中に三十一回頻出する。

そこで、「オホセ」ならびに「御物語」(二回のみ)の出ているところ

『歎異抄』の“おほせ”に聞く

をしらべてみると、本文中に以下のようにみられる。

前序	「御物語」 ^{オシモノガタリ} (漢文) 一回
師訓十条	「オホセ」 六回
中序	「オホセ」 二回
異義八条	「オホセ」 十回
後序	「御モノカタリ」 一回
	「オホセ」 十一回
合計	三十一回

となる。これを内容別に(A)仏(B)法然(C)親鸞(D)その他の人々と四分して列挙すると、次のようになる。

(A)「仏」一回
(1)第九章「仏カ子テシロシメシテ、煩惱具足ノ凡夫トオホセラレタルコトナレハ」
(B)「法然」聖人(よきひと) 五回

- (2) 第二章 「ヨキヒトノオホセヲカフリテ」
- (3) 同 「法然ノオホセ、ソラコトナランヤ」
- (4) 同 「法然ノオホセマコトナラハ」
- (5) 後序 「法然聖人ノオホセニハ」
- (6) 同 「トオホセサフラヒシカハ」
- (C) 「親鸞」聖人(上人) 二十三回
- (7) 前序 「故親鸞聖人御物語之趣」
- (8) 第三章 「トオホセサフラヒキ」
- (9) 第十章 「トオホセサフラヒキ」
- (10) 中序 「上人ノオホセニアラザル異義ドモ」
- (11) 第十二章 「故聖人ノオホセニハ」
- (12) から(19)まで八回
- 第十三章 論ずる上で後に別出掲げる。
- (20) 第十五章 「故聖人ノオホセニハサフラヒシカ」
- (21) 後序 「故聖人ノ御モノカタリニ」
- (22) 同 「トオホセノサフラヒケレハ」
- (23) 同 「聖人ノオホセノサフラヒシオモムキヲモ」
- (24) 同 「聖人ノツ子ノオホセニハ」
- (25) 同 「聖人ノオホセニハ」
- (26) 同 「トコソオホセハサフラヒシカ」
- (27) 同 「マタクオホセニテナキコトヲモ」

- (28) 同 「オホセトノミマフスコト」
- (29) 同 「古親鸞ノオホセコトサフラヒシオモムキ」
- (D) その他の人々

- (30) 中序 「近來ハオホクオホセラレアフテ」
- (31) 後序 「オホセラレアヒサフラウ」

以上である。

これまで拜見した限りで、仰せの言葉の使用回数をしらべ、問題にされた書物に、政木大空編著『歎異抄』序説「歎異抄入門案内」がある。ただし、その中の一五七頁一〇行目から一五九頁までの紙数における、ごく短かい論述である。またその回数についても、

師訓十条 五回(前述の回数より一回減)

中序 ナシ(例外として数に入らず二回減)

異義八条 八回(同一回減)

後序(結文) 十回(同一回減)

なお、「御物語」は数に入っていないので二回減となっており、合計八回減であるが、それはとりあげたかたによるであろう。

むしろ氏の次の解説によれば、回数を数えてまで問題にされた気持がよくうかがわれるであろう。

「法語文の方は、《法然》と《仏》の仰せが中心であり、歎異文の方は、主として《親鸞》の仰せである。……中略……『おほせ』は、信心相承の上で大切なもの、七祖相承の流れを、師資相承として、《親鸞》

から血脈相承をされた感激である。面授口訣の感涙である。それは、また、大きな誇りであったと思う。」

ここに先達として、尊敬の意をこめて載せさせていただきたい。

さて、現存最古の御真筆写本を遺された、蓮如上人の、『五帖御文八十通』の中に、

一帖目	五回
二帖目	四回
三帖目	一回
四帖目	五回
五帖目	一回

以上、合計十六回、『歎異抄』と同じく「オホセ」を、正しく宗祖親鸞聖人の御言葉として使用されている。

周知のごとく、その中の二回は、この『歎異抄』第六章の御引用である。すなわち、

「故聖人の仰^{おほせ}には、『親鸞は弟子一人もたず』とこそ仰^{おほせ}られ候ひつれ」

御文一帖目第一通
稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』62頁

右の例ばかりではなく、蓮如上人の『御文』の中の「仰^{おほせ}」の特色は、まったく『歎異抄』の「オホセ」が反映したかのように、いずれも、如来（『歎異抄』では「仏」）または親鸞聖人（一回は法然聖人）の御言葉

『歎異抄』の「おほせ」に聞く

であるということである。さらに注目したいのは、阿弥陀如来の「おほせ」として二回出ているところである。

「阿弥陀如来のおほせ^{われら}られるやうは、末代の凡夫、罪業の衆生たらんもの、罪はいかほどふかくとも、我を一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべしとおほせられたり」

御文四帖目第九通
前掲書 375頁

これは前に(1)から(31)まで一覽した通り、『歎異抄』に一回だけであるが、「仏」の「オホセ」として、

(1)第九章「シカルニ仏、力子テシロシメシテ、煩惱具足ノ凡夫トオホセラレタルコトナレハ」とあるのを髣髴とさせる。しかも『歎異抄』の場合、第十三章の表現では、「仏」が「弥陀」となっているのである。つまり、『唯信鈔』の原文では、

「仏、いかばかりのちからましますとしりてか、罪惡^とのみなれば、すくわれがたとおもうべき」^{（原本順寺出版部発行）} 【真宗聖典】924頁

とあるのを、言葉をかえて、

第十三章「弥陀イカハカリノ、チカラマシマストシリテカ、罪業ノミナレハ スクハレカタシトオモフヘキ」とされている。

以上のことから、前半師訓十条をうかがうと、聖人の御言葉の上に、

「ヨキヒト」「法然聖人ノオホセ」、さらには「阿弥陀如来のおほせ」までも聞かれていますのではないであらうか。

次に問題にしたいのは、前半師訓十条とはいささかかわった趣で出てくる、後半異義八条の中の「オホセ」である。

まず第十三章の八回〔前掲三十一回の所で省略した(12)から(19)まで〕を列挙してみよう。

- (12)「故聖人ノオホセニハ、^⑥『卯毛羊毛ノサキニイルチリハカリモ、ツクルツミノ宿業ニアラストイフコトナシト、シルベシ』トサフラヒキ」
 (13)「アルトキ『唯円房ハ、ワカイフコトヲハ、信スルカ』ト、オホセノサフラヒシアヒタ」

- (14)「サラハ、イハンコト、タカフマシキカ』ト、カサ子テ、オホセノサフラヒシアヒタ」

- (15)「タトヘハ、ヒト千人コロシテンヤ、シカラハ往生ハ一定スヘシ』ト、オホセサフラヒシ、トキ」

- (16)「オホセニテハサフラヘトモ…」

- (17)「百人千人ヲコロスコトモアルヘシ』ト、オホセノサフラヒシカハ」

- (18)「……願ノ不思議ニテ、タスケタマフトイフコトヲ、シラサルコトヲオホセノサフラヒシナリ」

- (19)「^⑥『サルヘキ業縁ノモヨホサハ、イカナルフルマヒモスヘシ』トコソ聖人ハオホセサフラヒシニ」

この八回、全部がそうではあるまいが、とくに注目したいのは、(13)か

ら(18)までの「オホセ」のことである。すぐにわかるように、この六回は、師訓十条の「オホセ」とはまったくちがう、詰問、あるいは説得調の「オホセ」である。

そして、それ以外の第十三章(12)の^⑥二重活弧、(19)の^⑥二重活弧の、二回の「オホセ」また第十二章(11)の^⑥二重活弧の「オホセ」(11)「故聖人ノオホセニハ^⑥『コノ法ヲハ信スル衆生モアリ、ソシル衆生モアルヘシト、仏トキオカセタマヒタルコトナレハ……』トコソサフラヒシカ」

第十五章(20)の^④二重活弧の「オホセ」

(20)「^④『浄土真宗ニハ、今生二本願ヲ信シテ、カノ土ニシテ、サトリヲハヒラクト、ナラヒサフラウソ』トコソ、故聖人ノオホセニハサフラヒシカ」

以上、四回^④^⑥^⑥^④二重活弧で、いずれも念をおすように、「(故)聖人ノオホセ」が明言されている。これらは、中序の(10)「上人ノオホセニアラサル異義ドモ」を厳しく指摘された「オホセ」であらう。後序の次の一節は、その意味をよく示していると考ええる。

(23)「アヒトモナハシメタマフ、ヒトヒト御不審ヲモウケタマハリ、聖人ノオホセノサフラヒシオモムキヲモ、マフシキカセマヒラセサフラヘトモ」

とある。その「聖人ノオホセ」にちがいない。端的にいえば、ここに「マフシキカセマヒラセサフラヘトモ」とあるように、聞かれただけの「オホセ」ではなく、相手に語られた、しかも、「閉眼ノノチハ、サコソシ

トケナキコトトモニテコソサフラハンスラメト、ナケキ存ジサフラヒテ、書きしるさずにおれぬ、自然とほとばしり出たとしてもいえる「オホセ」である。

ここで、いまひとつ明確にしておきたいことは、先程の後序の

「ヒトヒト（の）御不審」

それは、すでに前序にもあった

「同行者之不審」

その「不審」についてである。

もとにかえれば、この「不審」は、第九章の、聖人御在世のときの唯円房との対話で、

「親鸞モ、コノ不審アリツルニ唯円房オナシココロニテアリケリ」

と、聖人御自身もうけこたえされている「不審」と別ではありえないのではないか。

ここで再び、蓮如上人の上に、この「不審」をたずねると、

「前々住上人仰せられ候。不審と一向しらぬとは各別なり。しらぬことをも不審と申こと、いはれなく候。物を分別して、あれはなにと、これはいかなど、いふやうなることが不審にて候。子細もしらずして問申ことを不審と申まざらしかし候由。仰られ候」

【蓮如上人御一代記聞書】（第二二一条）

前掲『真宗聖典』896頁

稲葉昌丸編『蓮如上人行実』（『実徳集』）111頁

【歎異抄】の「おほせ」に聞く

とあり、

【五帖御文】の中にも、この「不審」、つまり疑問を問いたすことに對して、たとえば、一帖目第一通第四通第六通第十通第十五通などに、

「この不審もとも肝要とこそ存じ候へ」

「まことにもて、このたづねのむね肝要なり」

等と、【歎異抄】のような、問いに對するうけこたえをされている。

まことに、【御物語】「おほせ」の一語一語には、聞かせていただいた事実から、また新たにでてくる疑問があつたであらうし、これからも出てくるであらうことを、同感同悲同歎しての、正しく【歎異】のひびきが伝わってくるようである。（平成2・5・8）

（平成元年六月二十七日開催の研究懇話会で発表させていだいたものを整理いたしました。）

【御文】一帖目第四通
前掲書 90頁

【御文】一帖目第一通
【蓮如上人遺文】62頁